

がんサバイバー

医学・心理・社会的アプローチでがん治療を結いなおす

Kenneth D. Miller 原書編集

勝俣範之 監訳

金 容壺, 大山万容 訳

<書評者> 内富庸介 (岡山大学大学院教授・精神神経病態学)

一昔前, がんサバイバーという
と「治療後 5 年を経過した稀な幸
運な人」を意味し, 最初の 5 年間
は医師も患者ももっぱら疾患コン
トロールに傾注し, 心の問題は後
回りという風潮ではなかったかと
思う。現在では, 生存率の大幅な
改善とともに, 米国のサバイバー
は 1,200 万人に達した。「がんと診
断されたその瞬間に人はがんサバ
イバーとなり, 一生サバイバーで
あり続ける (全米がんサバイバー
シップ連合, 1984)」という定義
が米国国立がん研究所 (NCI) に
採用されて以降, プロセスを意味
するサバイバーシップの概念とと
もに広がり, 日本ではがん対策基
本法 (2007) 以降浸透してきたと
いえる。

本書は, あらゆる医療者のため
の, がん診断時からのサバイバー
シップ指南書であり, よくある疑
問や懸念に正面から向き合ってい
る。特筆すべき点は心の問題や回
復過程をロードマップとして目に
浮かぶように本書の前半分を割い
て詳述していることで, 疫学的問
題, 医学的問題の後半へと続く。
編集者の Kenneth D. Miller 所長
は, 現在, Dana-Farber がん研究所
Lance Armstrong サバイバーシッ
ププログラムの所長を務めている
が, 腫瘍内科医であり, がんサバ
イバーの夫でもある。彼は, サバ
イバーシップ研究のエビデンスが

蓄積したところで, 編集して本書
を誕生させた。

前半で, がんがもたらす抑うつ・倦怠感・睡眠障害, 心的外傷
後ストレス/成長, さらに恩恵を
見出すベネフィット・ファイン
ディング, セクシュアリティ, 妊
孕性, 遺伝カウンセリング, がん
診断～終末期であることを子ども
に伝えるコミュニケーション, 家
族などについて詳述されている。
その中で, NCI サバイバーシップ
部門長の Julia Rowland 博士の重
要な講演内容から, サバイバーの
5 つの教訓を紹介している。

1) がんが消失した状態はがん
から自由であることを意味しない
(倦怠感, 抑うつ, 痛みなどの問
題は慢性期にも多い)。

2) 回復へ移行する時期はスト
レスが多い (医療者が身体治療を
乗り切ってホッとする時期に心理
的危機はやってくる)。

3) 困難な時期であっても驚く
べき回復力や恩恵を見出せること
がある。

4) 適応のよさには, 標準治療
を選択すること, 治療に積極的に
参加すること, 活動的であること,
支援を受けること, 意味を見出し
ていくことなどが結びついている。

5) 食生活などライフスタイル
を見直す好機になる。

以上のことは, 「実際のがんは自

分ではコントロールできないかも
しれないが, 食生活や活動, 治療
の決定は自分でコントロールでき
る」という体験を通して, がんとい
う出来事も自分の世界感に結い
直す (認知的統合) ことができる
という臨床経験とよく符合する。

トラウマを成長の機会としてと
らえ, 恩恵を見出す患者に出会う
ことは非常に多い。その恩恵には,
ソーシャルサポート, 診断時から
の時間が関連する一方で, 若年者,
マイノリティー, がんが重篤であ
ることも関連するという研究報告
を紹介している。さらに恩恵には
メンタルヘルスに対してよい面と
悪い面があり, 現実の変化か動機
付けられた幻想かという論争に決
着はついていないという。現時点
では少なくとも, 医療者はがんが
もたらす恩恵やギフトを否定したり,
押しつけたりすることは避け
たい。

日本にも支部のある Cancer
Support Community の Golant 博
士は, サポートグループの効用と
して, 最良の状態を期待すると同
時に最悪の場合にも備えるよう促
された患者は, がんの嫌な現実を
も評価して受け入れていけるよう
になることを紹介している。医療
者は診断時から, 生と死に関する
コミュニケーションを促し, 備え
あれば憂いなしをぜひ, 少しずつ
診療に生かしてほしい。

なお後半ではサバイバーの医学
的問題として, 治療による全身の
各臓器障害, 術後リンパ浮腫, 妊
孕性保護について, また疫学的問
題として, エクササイズ, 食事,
二次がんについて詳解されてい
る。特にサバイバーの食事に関す
るエビデンスは限られているが,
がん以外の疾患にも有益であり,
さらに QOL を増すという利点を

紹介している。

訳は非常に練られており、違和感を覚えるところは全くなかった。腫瘍内科医である訳者のあとがきに、患者を単なる「中年の乳がん患者」と記号化するのではなく、「ピアノが好きで仕事で教えてもらわれて、子どもさんが高校生で受験の心配もされておられ、夫

は会社員だけれど……頼れる友人もいる……」と「描写していくべきなのである」とある。小生は、訳者とがんセンターで一緒に働いた時期があり、彼の温かい基本的態度が思い出される。その後、彼が腫瘍内科医として本書をいち早く訳出したことを素直に喜び、多くのサバイバーの福音となる本書

を世に出したことに心の底から感謝したい。

●A5 頁 464 2012 年
定価 4,200 円
(本体 4,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01522-6]
医学書院 刊